

氏名	山本 祐子
学位の種類	博士 (英文学)
学位記番号	文博乙第 11 号
学位授与の年月日	令和元年 9 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当 文学研究科 英文学専攻
論文題目	マーク・トウェインによる名脇役の女たち —文学における女性表象とアメリカ論考
論文審査委員	主査 教授 丸橋 良雄 副査 教授 木村 恵子 副査 教授 永渕 朋枝 副査 京都大学大学院 教授 水野 尚之

## 論文内容の要旨

本博論（単著）の目的は、約 1 世紀にわたるマーク・トウェイン批評にあつて絶えず軽視され非難を浴びてきた女性登場人物に光を当て、トウェインの女性描写には重大な意味があり、さまざまな情報が隠されていたことを提言し論証するものである。これにより女性描写に関する定説やフェミニズム論から脱却し、独創的な視点を提供したという点で、トウェイン研究のみならずアメリカ文化・文学研究における意義は大きいと思われる。

マーク・トウェインといえば、アメリカ人男性を描かせたらアメリカ随一であり、ハックルベリー・フィンをもってしてアメリカ人（男性）の原型を呈したとまで評された作家である。だが女性を描くのは苦手なだけで、そこが彼の唯一の欠点と見なされてきた。彼の描く白人女性たちは、信心深くて母親的な中年女性か脆弱で可愛らしいヒロインの 2 タイプしかなく、ヴィクトリア朝的女性像を踏襲するだけの平板で凡庸な描写に終始していたからである。またトウェイン文学から建国期アメリカの自由や独立心を、つまり男性的な要素を読み取ることに意義を見出す風潮にあつて、トウェインのヴィクトリア朝的女性たちは小説に花を添えるだけの飾りにしか見えなかったのである。

こうした事情から、従来女性登場人物の研究は取り残され、女性登場人物を中心とした研究書も殆ど出版されなかった。日本においては本書が初めてとなる。作品の女性研究が

進まなかった理由は他にもある。1970年代にフェミニズムの大きな波が押し寄せると、トウエインの女性描写は差別的とされ、さらに激しい非難にさらされたからである。彼はステレオタイプ化された上品で従順な女性像を繰り返すことで、社会の求めるジェンダーロールを徹底し、そこに女性たちを閉じ込めてしまったと考えられたからである。フェミニズム的視座は近代女性研究の主流を成しており、これをもとにトウエインの女性の扱い方を批判・否定する議論は強化され、定説となっていた。この定説を覆し、つまりフェミニズム的視座の限界を提示し、女性登場人物が存在する意義を見出したのが本論文である。

そこで本論文の前半である第3章までは、トウエインの女性表象すなわちステレオタイプ化された女性描写を詳解し、それらには豊富な文化的コンテクストが含まれていて、多元的な視野を提供していたことを論証するものである。これまではフェミニズム偏重の傾向にあつてトウエインの女性表象は差別的と糾弾されてきた。だが表象とは本来ヨーロッパやアメリカの文化的・歴史的背景をくみ取って醸造されてきたイメージ像でありシンボルでもある。この点から女性表象を読み解くことにより、19世紀のアメリカを突き動かしてきた思潮や背景が見えてくる。

第1章で取り上げるジャンヌ・ダルクも実に豊富な文化的コンテクストを含んでいた。トウエインはいつも男性の主人公ばかりを扱っていたが、ジャンヌ・ダルクという女性にだけは例外的に強い執着を示し、彼女を主人公に据えた歴史小説『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想』を匿名で出版した。だが彼にとって唯一の女性主人公ジャンヌは実に陳腐でセンチメンタルに造形されていたのである。というのもジャンヌは可憐で心優しい少女であったことが強調され、この聖なる乙女がイギリス軍によって迫害され処刑される様子がひどく感傷的に語られている。無垢な乙女が迫害される（あるいは殉教する）というのは感傷小説やゴシック小説で繰り返されてきた筋書きで、それらに登場するヒロインたちは「迫害を受ける乙女」あるいは「悲劇のヒロイン」という女性表象として定型化されていた。つまりこの作品は古典的な女性表象をなぞっただけの小説と映り、躍動感あふれるアメリカ人（特にアメリカ人男性）を描いてきたトウエインには相応しくないと考えられ、近年まで顧みられることはなかった。しかしジャンヌ・ダルクは、ヨーロッパの聖女伝承や叙事詩伝統を吸収しつつ、近代西洋諸国を席卷した偶像文化を背景にして形作られてきた女性表象であった。そしてトウエインはこの女性表象を一種の記号として利用し、そこに集約されていた社会的・文化的思潮を読者に伝えていたのである。ジャンヌは時代の象徴でありシンボルであったことを認識すると、その先には民衆をナショナリズムへと駆り立てようとする建国期アメリカの国家的戦略までが見えてくる。

第2章では、「悲劇のヒロイン」と並んでもてはやされた女性表象「早世の乙女」に論を移した。19世紀半ばになるとロマン主義の高まりにより、はかなく散った乙女をモチーフとしたエレジーや絵画が流行し、量産型版画や挿絵あるいは雑誌記事といった大衆文化においても「早世の乙女」は盛んに取り上げられていた。こうして「若い女性と死」あるいは「若い女性と死を悼む行為」は密接に結びつけられ、実生活においても身内の死を悼む

のは女性の役割とされていたのである。強調したいのは、トウェインの描く「早世の乙女」が当時の死生観や服喪文化を映し出す鏡であったということである。19世紀とは死体にたいする感受性が前世期と比べて大きく変化した時期でもあり、アメリカ人が死体にたいして近代的な眼差しを持つようになる転換期にあったことも、トウェインの描く「早世の乙女」から読み取れる。そしてトウェインがなぜ死体を数多く扱ってきたのか、不可解とされてきた彼のグロテスクな趣味を理解する鍵も「早世の乙女」にあった。

第3章では、前章で取り上げた「悲劇のヒロイン」を心理学研究の見地から考察した。トウェインは実をいうと「記憶」を語ってきた作家であったともいえる。彼の代表作『ハックルベリー・フィンの冒険』は、舞台となったミシシッピ河湖畔の生活から登場人物やエピソードにいたるまで、彼の少年時代の「記憶」を下敷きにして創り上げたものであった。ところがトウェインはこの作品の続編「ハック・フィンとトム・ソーヤーのインディアン捕囚記」に取り掛かったとき、意外なことに、溢れんばかりの「記憶」の泉に手をさしのばすことを止めてしまう。「記憶」を語る作家は、「記憶」とはそもそも何であるのかという疑問を抱き、その思索を作品に反映させてしまったのである。換言すれば、物語におけるハックとトムはフロンティアの荒野をさまようなかで、五感とともに「記憶」を失い、人間としての自我を崩壊させていく過程が描き出されていたのである。それは、19世紀に萌芽した深層心理学の影響を受けて、意識下の自己を探求するための実験的な試みでもあった。ところがトウェインは、この作品以降、「記憶」と自我あるいは無意識という問題を作品で扱っては、途中で投げ出してしまうようになる。そして頓挫した未完作品群では、必ずといっていいほど、「悲劇のヒロイン」が登場するのである。完成することのなかった作品において、いわば私的な創作活動において、トウェインは自己という問題とどう向き合っていたのか、そしてそこに投入された「悲劇のヒロイン」が何を表していたのかを考察した。

本論文後半では、トウェインの死後100年目にして初めて解禁された未検閲の自伝原稿や備忘録、あるいは未発表短編や未完原稿といった膨大な未公開資料を精査し、19世紀の女性たちは家父長制やジェンダーロールに必ずしも収まって暮らしていたわけではないこと、ヴィクトリア朝的価値観では割り切れない現実や文化が広がっていたことを明らかにした。しかも女性たちのこうした実態を当時の社会はある程度容認しつつも、公の記録には残さないという文化・良識があったことを指摘したのも、本論文の意義の一つである。つまり公表された文学作品や文書には残っていないが、19世紀の女性に我々現代人の知らない素顔があったことを突き止めたのである。この隠されてきた女性たちの素顔と照らし合わせながら、トウェインの女性描写を考察するとき、さまざまな情報が浮かび上がってくる。トウェインは万人受けする画一的な女性表象を取り込むことで、女性たちの何を隠してきたのか、またなぜ隠さねばならなかったのかを浮き彫りとなるからであると論じる。

第4章では女性たちと決闘文化の関係を明らかにするために、トウェイン作品の女性登場人物とそのモデルとなった実在の女性たちを比較した。小説における女性たちはみな社

会的にも肉体的に非力で、心優しく、子育てや宗教あるいは単に結婚相手を探すだけの退屈な人生を歩んでいたように見える。だがそれは、女性たちの生活におけるほんの一部に過ぎなかったのである。実際には南北戦争以前の南西部では、暴力と侮辱には戦いをもって報いて汚名をそそぐ慣習である「決闘文化」が根強く残っていて、男性のみならず女性の精神性にまで大きく影響を及ぼしていた。つまり当時の女性たちは我々が考える以上に暴力的で攻撃的でなければ生き残れなかった。その現実をトウェインは小説においてあからさまに描くことはしない。だが19世紀の読者にだけは、つまり女性たちの現実を実生活において見知っている同時代人にだけは察することができるよう手がかりを残しつつ、女性たちを描いていた。おとなしそうな女性登場人物たちも、ある状況化では一転して暴力的となり、武器をもって立ち向かっていたとなれば、我々の見方も一変する。当時の読者には見えていた現実と照らし合わせて彼女たちを読み直すとき、そこには「伝統的な女性像」から大きく外れた姿が見えてくる。

第5章では、女性の話し言葉（ヴァナキュラ）について詳細に考察した。トウェインは、白人男性と黒人の話し言葉を作品化し、それをアメリカにおける文学的伝統の一つにまで昇華させた作家として知られている。ところがそのトウェインも、白人女性の話し言葉にだけは手を出さなかった。実は文学における女性表象とは、外見や性格的な描写だけで形成されるものではなく、作中で語られる女性たちの言葉によっても画一的な女性表象は固められていった。それゆえトウェインも当時の道徳規範にならい、女性たちには道徳的で女らしい会話だけをさせて彼女たちの言葉遣いを制限することで、道徳的なイメージを塗り固めていかねばならなかった。では女性たちは実際にはどのような言葉遣いで、何を語っていたのか、手紙や日記に何を書いていたのか、実は殆ど分かっていない。言語学研究においても女性の話し言葉は看過されてきた分野であった。ところが近年公開された『マーク・トウェイン完全なる自伝』を見ると、トウェインは女性たちの私的な手紙や日記を収集し、彼女たちの偽らざる赤裸々な言葉を記録していたのである。だがそれらの殆どは公表されずに埋もれてきた。女性は言語まで抑圧されていたのだ。そこで本章では、当時の白人女性たちが実際に語っていたと思われる生の声を検証し、それが小説などの公の媒体ではどれほど校閲・削除されてきたか、あるいは体裁のいい台詞へと改変されていたかを考察することで、知られざる女性たちの現実やタブーを明らかにした。

第6章で扱うのは「笑わない女性」である。これもまた頑なに繰り返されてきた女性表象の一つであったことは全く知られていない。トウェインは「ユーモア話」の名手としても有名であるが、彼のユーモアを妻のオリヴィアはよく理解できなかったという逸話が残っている。こうした話は好んで取り上げられ、女性はユーモアを理解できないという言葉が広まり、「笑わない女性」という表象が定着した。当時出版されたトウェイン作品の挿絵を検証すると、歯をむき出しにして大笑いする女性の姿は全く描かれていない。女性が「ほほ笑む」ことには好意的であったが、「笑う」のは下品だとして厳しく制限されていた時代背景が読み取れる。そもそも当時の笑話<sup>しょうわ</sup>伝統は男性の専有物とされ、これを女性たちは楽

しむことも笑うことも許されていなかったと文学批評は断じている。ところが『マーク・トウェイン完全なる自伝』の出版により、現実の女性たちはユーモアを理解していたし、それで大笑いして楽しんでいたことが分かってきた。ただこうした女性たちの姿は公には隠され削除されていた。一方でクラブや晩餐会などで非公式に語られていた「ユーモア話」には女性を主題として扱った作品も多く、そこにいる女性たちは歯をむき出しにして大笑いし、無様な姿をさらけだして笑われていた。だが、笑う女性は隠すべきという社会的圧力から、こうした口承笑話も封印され、次世代には伝えられなかった。これらの貴重な資料を発掘して口承の笑話伝統にまで論を進めると、当時の笑いという問題から知られざる女性の文化まで明らかになる。

第7章で扱うのは『ハックルベリー・フィンの冒険』におけるミス・ワトソンとダグラス未亡人という女所帯の二人の女性である。19世紀アメリカといえば強固な家父長制社会であったと思われるが、実際にはミス・ワトソンとダグラス未亡人のように家父長制の枠から外れた女性たち、つまり女性だけで暮らす世帯も少なからずいて、トウェイン作品にも数多くみられる。つまり家父長制から外れる女性たちの存在については看過されてきた研究分野であるが、共同体の一部を占め社会問題にまでなっていたのである。しかしトウェインは相変わらずそうした女性たちの私的な事情に深入りはしない。ミス・ワトソンとダグラス未亡人は一見すると女性表象をそのままかたどったような人物で、平穏で家庭的に暮らしていたような描写をされている。しかしながら、第4章ですでに述べたようにトウェインは当時の人間には分かるような手がかりを残し、読者に推測させるという手法を使っていた。当時の読者が共有していた常識や現実を参照しながら彼らにとって見えていたものを再現するとき、女所帯の現実やあやうさが見えてくる。ミス・ワトソンとダグラス未亡人が屈強な男奴隷ジムとの間で危険なパワーバランスに陥っていたことや、従順で気のいい奴隷ジムがなぜ逃亡という大罪を犯すに至ったのか、そういったことも明らかになるのである。

## 論文審査結果の要旨

山本祐子氏は博士論文に代わるものとして単著『マーク・トウェインによる名脇役の女たち—文学における女性表象とアメリカ論考』を本年度の5月に出版した。目次・引用参考資料・索引も含めて総頁数はおおむね240頁にも及ぶ著作であり、序論と結びを除いて全七章から成り立っている。対象となるのは19世紀後半に矢継ぎ早に主要な作品を発表して、作家仲間から「彼こそ最初の真のアメリカ人作家であり、我々の全ては彼の相続人である」とまで言わしめたMark Twain (1835-1910)の作品研究であり、当時の歴史的、文化的背景も手堅く踏まえて、これまで共著や学会誌等に掲載された論文に適宜加筆修正を施した、山本氏の23年間の研究の集大成である。

日本においてトウェイン研究が高まるのは戦後のことであるが、日米あるいはドイツでもトウェインに関する研究書が次々と発表されるなかで、特に女性登場人物に関する研究だけは取り残されてきた。むしろ女性登場人物を扱うことは困難を極めたのである。というのも、19世紀のアメリカ文学はトウェイン作品を筆頭に男性を主体とした男性的な文化が尊ばれる伝統にあったことから、女性登場人物は軽視される傾向にあったからである。また、トウェインの描く特に白人女性たちは信心深くて母親的な中年女性か脆弱で可愛らしいヒロインの2タイプしかなく、ヴィクトリア朝的女性像を踏襲するだけの平板で凡庸な描写に終始しているとして絶えず非難にさらされてきた。それゆえトウェインは女性を描くのは苦手であり、女性描写はトウェイン唯一の欠点とまで言われてきた。しかも1970年代にフェミニズムという大波がうねり始めると、トウェインのステレオタイプ化された女性像は差別的だと非難する声が高まり、女性登場人物はさらに扱いにくい研究対象となってしまう。20世紀から現在にいたるまで女性研究はフェミニズム的視座をもとに構築されており、トウェインの女性描写を擁護する声は全くあがらなかったのである。

そういう批評の流れの中で、本論文の功績は女性軽視の文学伝統にあって初めて女性登場人物を真正面から取り上げた点にある。特に評価すべき点はフェミニズム論から脱却して、女性登場人物が存在する意義を論じ、女性登場人物には様々な表象が隠されていることを手堅く論証したことにある。そもそもこれまでは男性の登場人物を中心とした文学批評ばかりであったが、論文の前半部ではトウェインの描く女性たちがゴシック小説や感傷小説で定番化されていた「悲劇のヒロイン」像を踏襲していたことを認めている。さらに、この女性表象がヨーロッパ中世から連綿と続く聖女伝承や西洋列強を席卷したナショナリズム、急速に近代化するアメリカの服喪文化や死生観、あるいはロマン主義といった様々な思潮を汲み上げつつ形成されてきたイメージ像でありシンボルであったことを、山本氏は丹念に検証して突き止めたのである。こうした重層的な文化的コンテクストを「悲劇のヒロイン」像と比較することにより読み解いていくことで、トウェインの作品は男性中心の批評においては決して窺い知ることのできなかつた未知の側面が明らかになるという山

本氏の指摘は極めて説得力がある。

本論文のタイトルにあるように女性登場人物を扱うことを主眼としているため、女性が登場する主要作品を網羅した研究となっている。トウェインが唯一女性を主人公に据えた小説『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想』(1896年)を筆頭に、『金メッキ時代』(1873年)、『トム・ソーヤーの冒険』(1876年)、『ハックルベリー・フィンの冒険』(1884年)、『赤道に沿って』(1897年)などトウェインの主要10作品をほぼすべて取り上げている。生前未発表の作品を含めると、氏が参照した短編小説は20編を越え、未完作品も数多く扱っている。『ハックルベリー・フィンの冒険』の続編として執筆された未完小説「ハック・フィンとトム・ソーヤーのインディアン捕囚記」に加え、晩年書き溜められた未完短編群(一般に「悪魔の航海物語選」と称される作品など)も全て考察の対象にしており、きわめて広範囲にわたる研究となっている。

また本論文の後半部で特筆すべきは、トウェインの自伝を扱っている点である。トウェインは口述筆記などにより膨大な自伝原稿を残したが、その半分以上を死後100年間は封印するように厳命して亡くなった。これらの自伝原稿を未検閲のまますべて収録した『マーク・トウェイン完全なる自伝』(*Autobiography of Mark Twain, 2010-2015*)が、トウェインの没後100周年を記念して刊行されたが、全3巻、総頁数3000頁にも及ぶ大著であった。山本氏はこの完全版自伝の共訳者の一人としてトウェイン研究に大いに貢献している。これらのおびただしい未公開資料を精査することにより、氏は女性にまつわる記録、特にひた隠しにされてきた女性の現実を掘り起こすことができたという。具体的には、暴力的な争いや下品な笑いを認められていなかった当時の女性にも実は決闘文化や笑話文化があったことや、性の問題や階級・地域格差という現実、あるいはホモソーシャルなコミュニティ(互いの利益増進を目的とした女性共同体)を支えてきた迷信文化(民間信仰)や呪術治療等である。女性が当時実際に語っていたヴァナキュラ(アメリカ口語方言)をトウェインが筆記して自伝原稿に残しておいた箇所は特に貴重な第一級の資料であると、山本氏は指摘する。ヴァナキュラとはアメリカ独自の環境のもとで育まれたアメリカ英語とされ、このヴァナキュラで男性主人公が物語を紡ぐというスタイルはアメリカ文学の伝統の一つにまでなっている。その一方で白人女性によるヴァナキュラは、文学のみならず、記録にも殆ど残されておらず、言語学研究においても見過ごされてきた。なぜなら19世紀の女性はヴァナキュラを使用することも公には認められておらず、公式の文書において、その存在はひた隠しにされてきたからである。

自伝などの未公開資料から山本氏が明らかにしたのは、公開を禁じざるを得なかった記録であり、いわゆる隠されてきた女性たちの秘め事であった。つまり19世紀のアメリカ社会は女性に対して抑圧的であり、ヴィクトリア朝の厳しい道德律で女性たちをがんじがらめにしてきたと思われてきた。だが実際の女性たちは、社会の求める女性像から外れることも多かったが、ある程度は黙認されていた。むしろ許容しつつ、共同体全体で隠すという良識があったことを突き止めたことは山本氏の歴史的、文化的研究のたまものであり、

単なる文学研究に終始しない学際的な研究としても高く評価できる点である。要するに、アメリカには現代人には知り得ない隠された顔があったことを解明したからである。そして封印されてきた女性たちの現実も踏まえたうえで、従来の研究には見られない新たな作品解釈を提示しトウェイン研究に新たな展望を開いたことで、日本のトウェイン研究者からも山本氏の研究を評価する声はすでに上がっており、早晚好意的な書評が学会誌に掲載されることが期待できる。トウェインの作品に登場する女性に対する先行研究はアメリカでもほとんど例がなく未開拓の分野であったが、その意味では本論文は画期的な研究であるといえよう。本論文の下地となった学会誌に掲載された山本氏の英語論文は海外で引用されることもあり、小説という舞台では脇役に過ぎなかった女性登場人物に焦点を当てるといふこれまでにない独創的な視点を提示したことで、男性偏重であったアメリカ文学批評を浮き彫りにし、従来の文学批評では決してうかがうことのできなかった新たなアメリカ像を解明した功績は大きいといえよう。

トウェインの女性表象はさまざまな文化的コンテクストを提示し、隠されてきた女性たちの現実や影響力をほのめかしていることが明らかになると、女性の登場人物はトウェインの物語において脇役的な存在ではあったが、彼女たちが不在なままハックとトムといった主役の男性だけでは、アメリカの全体像を浮かび上がらせることは到底できなかったのである。その意味では名脇役である女性がトウェイン文学に登場する意義は極めて大きかったことを力説する山本氏の本論文は大いに首肯できるものである。

最後に次のようなコメントと課題が審査委員から出されたので言及しておきたい。一つ目は、文学研究に携わる者としてだれもが異論をはさむ余地のないことは、与えられた作品（テキスト）の一字一句を決しておろそかにせず丹念に精読するという姿勢であると思われる。本論文はサブタイトルからもうかがえるように、必ずしも作品論のみを扱った文学研究でないことは明らかであるが、もう少しテキストに密着した作品分析があってもよかつたのではないかという思いは残る。しかしながら、本論文は当時の歴史的、文化的背景も考察の対象にして、単にトウェインの主要な作品だけを取り上げただけでなく、20編以上の短編小説、未完作品、口述筆記による3000頁にも及ぶ膨大な未検閲の自伝原稿まで丹念に手堅く精査しており、単なる文学研究の枠には収まらない学際的な研究領域まで踏み込んだスケールの大きな研究となっていることは率直に認めたい。二つ目は、本論文中散見される「19世紀のアメリカ」という表現についてはあまりにも大雑把な枠組みであるので、もう少し年代を特定してスパンを狭くしたほうが良かったのではないかという意見が出された。三つ目は、歴史的、文化的背景に加えて、当時のアメリカの経済状況にも言及して論じたら、本論文にさらに厚みが出たのではないかという意見も出された。

以上のような課題は多少残るが、総合的に判断して、本論文が達成した学問的独創性と研究領域への貢献度はいささかも減じるものでないことは言うまでもない。

よって本論文審査委員会は、本論文を博士（英文学）としてふさわしい論文であると判断する。



### **試験結果の要旨**

本論文についての公開口頭試問は、大学院関係教員、非常勤講師、大学院生等 11 名の出席のもと、令和元年 7 月 31 日(水)13 時から概ね 2 時間近くにわたり行われた。最初の 60 分程度は論文の概要についてパワーポイントを用いて説明があり、その後十分な時間をかけて論文細部にまで及ぶ質疑応答が 4 名の審査委員との間で活発に行われた。論者の応答は的確であり、残された課題に関しても十分な理解を示し、今後の展望についての積極的な意欲を確認することができた。以上のように、口頭試問の結果は満足すべきものであった。

### **学力確認の結果の要旨**

山本祐子氏は関係学会ではすでに理事や編集委員の経験もある中堅の研究者であり、国際学会でも 3 件口頭発表した実績があり、学会誌に掲載された英語論文も海外の学者が引用するほどの優秀な論文として評価されている。学位論文の内容に関する公開の口頭試問においてもすでに満足すべき結果を示しているので、学位論文審査委員会は改めて学力確認のための試験は不要であると判断した。

### **学位授与の可否に関する意見**

以上の所見により、本論文は博士（英文学）の学位を授与するに値すると認められる。